



半世紀を迎えた国際福祉機器展(H.C.R.) ～これまでの経過とクリエイティブな未来を拓く～

全社協と保健福祉広報協会の共催による国際福祉機器展 (Home Care & Rehabilitation Exhibition : 略称「H.C.R.」) は、昭和49 (1974) 年、わが国初の福祉機器の展示会としてスタートし、令和5 (2023) 年、50周年を迎えました。

H.C.R.のはじまり ～草創期、施設整備を背景に～

昭和49年、国が進めていた社会福祉施設の緊急整備計画に伴い急増していた老人福祉施設などでは、介護職員の腰痛や頸腕症候群などの職業病が広がっており、介護の近代化のためには、車いす、ベッド、浴槽、洗濯機などの福祉機器を導入し、入所者の処遇向上と職員の負担軽減を図ることが急務となっていました。

このような背景のなか、同年11月に全社協と厚生省(当時)の共催による「社会福祉施設の近代化機器展」が開催されます。国内企業64社が出展し、3日間で9,641人が来場しました。

「福祉機器」という言葉も生まれていない時代、展示された機器は、福祉施設でのケアの向上や職員の腰痛予防のための機器が中心でした。その後、回を重ねるごとに障害者のための補装具やコミュニケーション機器、自助具、寝たきりの高齢者の介護用品、さらには保育所の遊具・教材まで広範囲に及び、改良や開発が進むこととなります。

先端技術の活用、ロボット開発へ

それから半世紀、H.C.R.は国際展示会としての実績を積み重ね、アジアを代表する展示会へと成長しました。福祉機器をリアルで「見て」「試して」「利用する」ための情報を得る場へとその役割も変化しています。

福祉機器の開発は2000年代に入るとさらに加速します。スマートフォンに代表されるICT機器が急速に普及し、

障害者や高齢者のコミュニケーションや情報収集などが簡単にできるツールとして定着します。また、先端技術を活用した福祉機器が注目され、ベッドからの移乗支援や見守りセンサー、介護業務支援といった分野でも研究開発が積極的に行われます。

2015(平成27)年には、政府が「ロボット新戦略」をとりまとめ、介護・福祉分野においてもロボット技術をはじめとする機器開発が重点分野として位置づけられることとなりました。

11か国2地域380社が集結 ～高齢者や障害者の自立、社会参加を促進～

少子・高齢化の急速な進行のなか、増え続ける介護ニーズに相反してサービス提供を担う労働力は減少します。それだけに、福祉機器の充実、ICT等の技術革新への期待が一層高まっています。介護・福祉サービスの付加価値・生産性を高めること、これはH.C.R.がスタートした50年前と変わらない課題とも言えます。

さらに、障害者や高齢者の生活をより豊かに、そして可能性が広がる社会をめざすうえで福祉機器の存在は欠かせません。

第50回となるH.C.R.2023には、10万人を超えるエンドユーザー、福祉施設・サービス事業者、企業、行政などの関係者が集い、コミュニケーションのなかで、新たな発見と未来への可能性を実感できる機会となっています。50回の積み上げのうえに、H.C.R.は新たなスタートを切ります。

▶ 第1回の展示会(昭和49年11月、東京都立産業会館大手町館)、

▼ 昨年、第49回展示会の様子(令和4年10月、東京ビッグサイト)

